

### 第3回リレー式授業改善協議会

期日：平成26年10月23日（木）

会場：ビーコンプラザレセプションホール 参加：宮崎

#### 1 開会あいさつ：後藤義務教育課長

- 昨年より始まったリレー式授業改善協議会は、学力調査結果を受けての授業改善の取組を全県下に広げようという趣旨であるが、今回は算数・数学の授業改善をその目的としている。
- 大分スタンダードが浸透してきており、1時間完結型や板書とノートの一体化、習熟の程度に応じたきめ細かい指導が広がっているが、その反面、思考力・判断力・表現力の育成が課題として明らかになった。そこで、問題解決的な展開の授業を実施していただきたい。それを新大分スタンダードということで、提示していく。

#### 2 講演：「全国学力・学習状況調査結果を踏まえた授業改善」

講師 国立教育政策研究所 学力調査官・教育課程調査官 磯部 年晃氏（資料1）

##### ＜全国調査問題を踏まえた授業改善＞

- 1.  $3+2=1$ . 5にならない理由を考えさせて説明する授業でも、全国調査問題を踏まえたことになる。
- 第6学年の速さについては出題したことはないが、単体量あたりの大きさの理解に課題があるので、プリンターの問題の授業を見た。秀逸なのは、最初に答えを予想させてから問題を解かせていた。さらに、割り算の式の意味を説明させていた。
- $100-20 \times 4=320$  と解答する誤りをどのように授業を行うか。秋田県 92.4%、沖縄県 93.5%の正答率であった。
- どこが課題なのかを捉えなければ、授業改善ができない。全て授業改善をしなさいということではない。
- 算数数学A問題は、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていなければならない問題である。しかし、それが活用できるようになっていないので、算数B問題が解けないのではないかと分析する。

##### ＜指導内容を明確にする＞

- 調査問題を再度把握してもらいたい。その後自校の課題傾向の理解をする、そうでなければ、すでにできている問題にも改善を加えることになる。
- 調査結果を分析する際に正答率のみを見るのではなく、解答類型を見ることが、どのような躓きをしているかという傾向を見ることができる。その躓きを見なければ、改善のポイントが見えてこない。
- 単体量あたりの大きさの意味の理解が曖昧な児童が大分県 20%いるが、そういった児童は単体量あたりの大きさだけを授業改善しても無理である。1年生の段階まで戻って、式の意味や目的を問うような学習の積み上げを行うことが求められる。
- こうした学習の積み上げを行っていくためには、小学校5年生だけ、中学校2年生だけががんばっても限界があるのである。学校全体で行わなければならない。

##### ＜授業改善について＞

- 算数B問題の正答率については、授業における子どもたちの縮図ではないか。あと少しで正解なのだが、正解まで引き上げてやる教師の揺さぶりが必要ではないか。
- 改善の結果がすぐには出ない。改善が進むのは、原因がどこにあるかが明確にしたときに初めてスタートできる。いいことをどんどん取り入れていくことはよいことであるが、そうなると、やることばかり増えてきて、しかもあまり効果が見られない。精選していかなければならない。

#### 3 講義：「思考力・判断力・表現力を問う評価問題について」

講師 国立教育政策研究所 学力調査官・教育課程調査官 磯部 年晃氏（資料2）

##### ＜評価問題を作成する際の意図的なしかけ＞

- しかけ1・・・自己選択、自己決定の場を位置付ける。「わかつつもり」「できつつもり」をゆさぶり、意味理解の深化を図る。
- しかけ2・・・考えること、答えることが焦点化された問題にすることで、問いたい力を明確にする。
- しかけ3・・・何をどこまで表現すればよいのか、子どもがゴール像を明確にできるようにする。

- テープの問題から、増えたらかけ算、減ったらわり算という2年から3年の意識から抜け出していない正解している子どもを揺さぶる。
- 授業で「考えて説明しよう」というめあてになっているが、一部の児童生徒の説明で授業が展開してはいないか確認する。そして授業の最後に評価問題ができるか。

#### ＜校内研修が自校の課題の解決に対応するために＞

- 評価問題が単独で存在するのではなく、授業と連動している。
- 板書や発問による改善でなければ、できないと思っている。
- 全国調査結果から課題があることがわかり、躰きが大きい単元に焦点化して研修する。そして、課題がある単元のねらいを達成した姿をできる限り具体化する。本時の授業のねらいを達成した姿（解決のプロセス、発言、ノートの記述）を評価できるように、指導案に児童の実際の反応を想定して書くことが大切。
- やることは地味だけれど、自校にとっての必然が明確化する。
- 児童・生徒に言語活動を充実させ、考えさせるならば、子どもたちの最後のゴールをあらかじめ想定しておく。具体的なゴールの姿を想定しておく。

#### 4 実践発表

(1) 「主体的に考え・表現する算数科授業のあり方」日田市咸宜小学校 教諭 梶原隆生（資料3）

- B問題をそのまま授業で扱うのではなく、思考力・判断力・表現力を育成する授業を展開することが必要である。
- 思考力を育成するための1時間完結型の算数科の授業の流れ「問題—自力解決—ペアトーク、相互評価、全体交流—まとめ—練習問題
- 発表をさせることが大切なのではなく、一人一人が考えを記述できることが大切。
- どちらの答えになるか、自己決定させた後考えさせていった。主体的に考え・表現する算数科学習をめざす。

(2) 「生徒が意欲的に取り組む授業をつくろう」竹田市中学校数学部会の取り組み 竹田南部中学校 教諭 後藤哲治（資料4）

- 竹田市の学力調査についての結果は、正答率が国や県を上回っている。
- 竹田市数学部会のキーワード「生きていく力」「思考のふるさと」
- 教材・教具について単元の導入で用いる。数学的活動を充実させている。操作を通して、いろいろなアイディアが生まれ、柔軟な思考が期待できる。それが思考のふるさとになる。
- いいものはみんなで使う。自分一人ではできないものはみんなで使う。

5 説明：「学力調査結果を受けて、組織的に取り組む授業改善」義務教育課 本田指導主事（資料5）

- 平成26年度学力調査結果（大分県）と経年的な大分県の課題
- 新大分スタンダード
  - ①1時間完結型 ②板書の構造化・板書とノートの一体化 ③習熟の程度に応じたきめ細かい指導の充実
  - ④問題解決的な展開の授業
- 算数・数学の指導改善のポイント
  - ①算数・数学的活動の充実
  - ②数学的な表現を用いて、根拠を明確にし、説明し伝え合う活動の重視
  - ③ねらい・活動・評価の一体化を図る授業の実践